

2022年度 戦略的創造研究推進事業（ACT-X） 新規採択課題・総括総評

戦略目標：「老化に伴う生体ロバストネスの変容と加齢性疾患の制御に係る機序等の解明」
「ヒトのマルチセンシングネットワークの統合的理解と制御機構の解明」
「革新的植物分子デザイン」
「細胞内構成因子の動態と機能」
「多細胞間での時空間的な相互作用の理解を目指した技術・解析基盤の創出」
「ゲノムスケールの DNA 合成及びその機能発現技術の確立と物質生産や医療の技術シーズの創出」
「実験とデータ科学等の融合による革新的材料開発手法の構築」

研究領域：「生命現象と機能性物質」

研究総括：豊島 陽子（東京大学 名誉教授）

氏名	所属機関	役職	研究課題名
石橋 公二郎	金沢大学 がん進展制御研究所	助教	シグナル伝達物質として機能する DNA を介した細胞間コミュニケーション
大久保 周子	京都大学 iPS 細胞研究所	特定研究員	老化に関わる新規非標準的翻訳産物の同定
尾幡 穂乃香	北海道大学 大学院生命科学学院	大学院生（博士課程）	ゲノムの異常機構を狙い撃つ放射性白金化合物の開発
川口 祥正	京都大学 化学研究所	助教	コアセルベートを基軸とした抗体の細胞内導入と相分離制御
河崎 陸	広島大学 大学院先進理工系科学研究科	助教	カルボラン集合体を用いたアブスコパル効果誘導と難治性がん治療応用
小坂元 陽奈	理化学研究所 生命機能科学研究センター	基礎科学特別研究員	内在及び人工アミノ酸センサーの同定と開発
佐藤 一輝	理化学研究所 環境資源科学研究センター	基礎科学特別研究員	植物免疫誘導性の抗線虫物質とその生合成遺伝子の同定
高橋 泰伽	自然科学研究機構 生命創成探究センター	日本学術振興会特別研究員 (PD)	ナノ薄膜による生体脳の超広範囲光計測法の確立と疾患モデルへの応用
辻 貴宏	名古屋大学 大学院医学系研究科	日本学術振興会特別研究員 (PD)	オプト・オミクスが明らかにする脳内微小環境と癌細胞の分子基盤
出口 清香	京都大学 大学院医学研究科	大学院生（博士課程）	臓器間・異種間相互作用を再現できるヒト腸肝モデルの開発

富永 直臣	山口大学 大学院医学系 研究科	助教	ゲノム情報と創薬をつなぐ局在評価法の構築
平野 利忠	東京大学 医科学研究所	特任研究員	膵島の若返りによる糖尿病の予防・治療
廣木 進吾	東京都医学総合研究所 基礎医科学研究分野	固有研究員	老化ダイナミクスを駆動する遺伝子カスケードの同定
廣瀬 健太郎	国立循環器病研究センター 研究所	上級研究員	機能拡張を目指したユビキノロン制御機構の解明
福田 昌弘	東京大学 大学院総合文化 研究科	特任助教	光で制御されたアミノ酸膜輸送の分子機構の解明
藤田 恭平	東京大学 大学院医学系 研究科	助教	糖転移酵素活性検出蛍光プローブの開発による疾患バイオマーカーの探索と創薬への展開
藤原 悠紀	大阪大学 大学院連合小児 発達学研究科	助教	新規細胞内分解経路を介した老化制御の研究
松長 遼	東京大学 大学院工学系 研究科	助教	特異的分子認識場のデータ駆動型設計
三宅 崇仁	京都大学 大学院薬学 研究科	助教	神経間シナプス接続捕捉システムが明かす「時刻」の出力回路基盤
村上 光	静岡県立大学 薬学部	助教	細胞内温度に着目した局所的オミクス手法の創出
横尾 英知	京都府立医科大学 大学院 医学研究科	助教	ナノ粒子型タンパク質分解誘導剤の活用

(所属・役職は応募時点)

(五十音順に掲載)

<総評> 研究総括：豊島 陽子（東京大学 大学院総合文化研究科 名誉教授）

本研究領域は、「生命現象」、「機能性物質」という2つのキーワードの下に、多様な分野にわたる挑戦的な若手研究者による新しい価値の創造につながる基礎的な研究を推進します。具体的には、「生命現象」に関連する新規物質・材料の設計・創成及び生体分子や微生物等の発見や機能解析、活用など生命現象の解明・制御・応用に関する研究を対象とします。また、物質・材料と生体の相互作用に関わる計測や評価に関する研究も含みます。これらの研究に貢献する生命科学、化学、工学、物理学等の幅広い分野において、「機能性物質」を基軸として、医療・健康分野や生命現象の解明等の研究に貢献しうる物質・材料の研究について、新しい発想に基づいた挑戦的な構想を支援していきます。

本研究領域で最初の公募となる2022度は179件の意欲的な提案がありました。14名の領域アドバイザーの協力を得て書類選考を進め、44件の面接選考を経て最終的に21件の研究提案を採択しました。各選

考過程では利害関係にある領域アドバイザーの関与を避け、厳正な評価を行いました。選考では、研究者として将来的に取り組みたい研究の夢を描き、2年半でその芽となる研究に実際にチャレンジしていく「独創性、主体性」、「将来性・未来性、潜在力」、「情熱・気概」を重視し、短期的な視点ではなく、10年後、20年後を見据えて成長が期待できる研究テーマを高く評価しました。また、採択者が多様であることは採択後の交流においても重要であるという立場から、研究分野が特定の狭い分野に集中しないように、バランス良く採択するように心がけました。この結果、多岐にわたる専門分野において意欲的な研究提案を採択することができました。

応募いただいた研究提案の中には優れたものが多数あり、選考はたいへん厳しいものとなりました。その中で採択された研究者の方々には、独創的・主体的な研究に思い切りチャレンジしていただきたいと思います。そして、研究者同士やアドバイザーとの交流を通じて新しい視点を得て研究構想を発展させ、さらに、異分野の研究者との出会いによりご自身の研究の幅を広げ、将来さらに飛躍するための礎を築いていただくことを期待します。

今回の選考において最終的に採択とならなかった研究提案の中にも魅力的な提案が多くありました。機能性物質と生命現象とのつながりを明確にし、研究計画における準備状況などの説明が十分であれば、採択された研究提案と遜色のない提案がありましたので、次年度の募集ではそのような部分を見直し、再挑戦していただきたいと思います。

次年度も基本的に本年度と同様の方針で2回目の募集を行う予定です。「生命現象」も「機能性物質」も間口を広くして幅広い専門分野からの提案を求めると同時に、本領域内での研究の連携や異分野融合による発展が期待できるような特に、有機合成・材料、分析・計測、ケミカルバイオロジー分野に軸足を置いた研究者からの提案を歓迎します。今年度の全応募者の平均年齢は31.7歳、採択者の平均年齢は30.9歳で、採択者の3分の1は20歳代でした。実験を主体とする研究提案がほとんどである中、今後も研究経験年数や論文数などの実績にとらわれることなく選考を行い、若手研究者の自立支援を行っていきたいと考えております。

戦略目標：「「総合知」で築くポストコロナ社会の技術基盤」

「情報担体と新デバイス」

「次世代 I o T の戦略的活用を支える基盤技術」

「情報デバイスの超低消費電力化や多機能化の実現に向けた、素材技術・デバイス技術

・ナノシステム最適化技術等の融合による革新的基盤技術の創成」

「ネットワークにつながれた環境全体とのインタラクションの高度化」

「微小エネルギーの高効率変換・高度利用に資する革新的なエネルギー変換機能の原理解明、

新物質・新デバイスの創製等の基盤技術の創出」

研究領域：「リアル空間を強靱にするハードウェアの未来」

研究総括：田中 秀治（東北大学 大学院工学研究科 教授）

氏名	所属機関	役職	研究課題名
阿部 博弥	東北大学 学際科学フロンティア研究所	助教	生体接着する生物模倣バイオセンサー
易 利	大阪大学 大学院基礎工学研究科	助教	Compact and low cost ultra-wide band photonics-based 3D imaging system at millimeter/terahertz band
石井 綾郁	日本電信電話（株） コミュニケーション科学基礎研究所	研究員	電気分解を利用した 3D プリンティング手法の研究
宇佐美 雄生	九州工業大学 大学院生命体工学研究科	助教	化学ダイナミクスを計算資源とした低消費電力マテリアルリザーバーの開拓
大澤 啓介	早稲田大学 情報生産システム研究センター	助教	遠隔・在宅での利用を目指した手指リハビリ支援デバイス
齋藤 真	九州大学 大学院工学府	大学院生（博士課程）	マイクロ渦による藻類の応答特性評価に基づく高出力光合成電池の創出
澁谷 達則	産業技術総合研究所 計量標準総合センター	研究員	半導体ハードウェアセキュリティを強化するナノ X 線源の開発
島田 啓太郎	東京大学 大学院工学系研究科	大学院生（博士課程）	世界最高速の 3 次元カメラの開発
庄司 観	長岡技術科学大学 技学研究院	准教授	自己発電型昆虫サイボーグによるセンサネットワークの創製
田中 峻	東京大学 大学院工学系研究科	大学院生（博士課程）	あらゆる加工機に精緻な感覚を持たせる大規模センサアレイの開発
田村 和輝	浜松医科大学 光先端医学教育研究センター	助教	光学式硬さ顕微鏡実現のためのホログラフ照明法の開発

野邑 寿仁亜	三菱電機（株） 情報技術 総合研究所	研究員	平面導波路増幅器を用いた高出力かつ低雑音なモード同期レーザの開発
橋本 健	東京大学 大学院情報理工 学系研究科	大学院生（博 士課程）	把持型力提示装置による身体図式と身体的自己の設計
畑山 祥吾	産業技術総合研究所 エレ クトロニクス・製造領域	産総研特別研 究員	低環境負荷と高耐熱性を兼ね備えたセレクトデバイス の創製
福井 慧賀	山梨大学 大学院総合研究 部	助教	水素陰イオンを用いた新規蓄電デバイスの創出
本間 浩章	東京大学 生産技術研究所	特任助教	グラニューール MEMS 振動発電
前田 拓也	東京大学 大学院工学系研 究科	助教	強誘電体/窒化物系半導体ヘテロ接合による革新的トランジスタの創成
森田 崇文	東京大学 大学院学際情報 学府	大学院生（博 士課程）	流体応用による自律駆動型生態模倣インターフェースの構築
森田 智博	東京大学 大学院情報理工 学系研究科	大学院生（博 士課程）	新生血管の誘導構築を可能とするバイオ 3D プリンタ
吉本 将隆	東京工業大学 物質理工学 院	大学院生（博 士課程）	光を当てるだけで充電可能な光蓄電池の創成
梁 逸偉	大阪大学 大学院理学研究 科	大学院生（博 士課程）	固体ナノポアを用いた塩分濃度差発電技術の開拓

（所属・役職は応募時点）

（五十音順に掲載）

<総評> 研究総括：田中 秀治（東北大学 大学院工学研究科 教授）

「Society 5.0」は、サイバー空間とリアル空間の融合によって実現していくものです。近年、デジタル技術やAI技術が注目され、サイバー空間に関する研究開発や教育が強化されていますが、リアル空間側でも同じような研究開発と教育の強化が必要です。そこで、本研究領域では、将来の強靱社会を構成するリアル側の技術、具体的には、ハードウェアに関する先進的かつ挑戦的なアイデアを持つ若手研究者を支援します。

2021年度に発足し、2回目の募集となる今回は、52件の応募を頂きました。応募者の平均年齢は29.0歳で、大学院生からの研究提案も17件あり、若手研究者の本領域への関心の高さを感じました。

採択提案を決めるにあたり、11名の領域アドバイザーの協力を得て書類選考し、次に選ばれた33名の候補者に対して面接選考を行いました。厳正な審査の結果、21件の研究提案を採択致しました。採択者の平均年齢は28.0歳、大学院生は8名となっております。ハードウェア研究に対してアイデアと熱意を持つ研究者が集まり、本領域の2期生として先進的かつ挑戦的な研究構想を実現していきます。

領域運営では、ハードウェアの研究・開発・設計・製作で第一線の研究を進めている領域アドバイザーが採択者の担当アドバイザー（メンター）となり、領域会議（クローズドな場での研究発表）やサイト・ビジット等を通じて、採択者の研究構想の実現と研究者としての個の確立のためのアドバイスをを行い、また、研究の展開のため異分野の研究者との意見交換を促進します。さらに、研究実施中の「さきがけ」へのステップアップ（早期卒業）、産学共同研究への橋渡しなど、採択者が研究者として着実に成長していけるようなサポートも行います。

選考にあたっては、「提案するハードウェアの具体的なイメージ、その有用性、新規性、および挑戦性」と「実現のための手段と計画」を特に重視しました。

不採択になりました研究提案の中にも魅力的な提案があり、研究計画中に実現したいハードウェアのビジョンやイメージが不明確な点を除けば、採択された研究提案と遜色のない研究提案も含まれていましたので、次年度の募集ではそうした部分を見直し、再挑戦して頂けることを期待しています。

採択された課題は「ハードウェア」分野を広くカバーしていますが、次年度はこれに加えて、産業界の課題解決につながるような構想を持つ企業所属の研究者、理科系の枠を超えた研究者などからの研究提案も期待します。

戦略目標：「気候変動時代の食料安定確保を実現する環境適応型植物設計システムの構築」

「急速に高度化・複雑化が進む人工知能基盤技術を用いて多種膨大な情報の利活用を可能とする統合化技術の創出」

「実験とデータ科学等の融合による革新的材料開発手法の構築」

「次世代 I o T の戦略的活用を支える基盤技術」

「多細胞での時空間的な相互作用の理解を目指した技術・解析基盤の創出」

「信頼される AI」

研究領域：「AI 活用で挑む学問の革新と創成」

研究総括：國吉 康夫（東京大学 大学院情報理工学系研究科 教授）

氏名	所属機関	役職	研究課題名
奥村 圭祐	東京工業大学 情報理工学 院	大学院生（博 士課程）	マルチエージェント経路計画における環境 最適化
桶谷 龍成	大阪大学 大学院基礎工学 研究科	助教	深層学習を利用した分子性結晶のキラリテ ィ判別
加藤 淳	産業技術総合研究所 人間 情報インタラクション研究 部門	主任研究員	AI を活用した創造性支援環境による創作文 化の構成論的研究
河野 誠也	理化学研究所 情報統合本 部	特別研究員	特許文書読解支援のための談話構造解析基 盤の確立
小島 駿	宇都宮大学 工学部	助教	深層学習による無線通信・レーダ信号処理 融合技術の創出
小林 里瑛	東京大学 大学院工学系研 究科	助教	超長期観測に基づく土地所有理論の相互動 学化とその刷新
小松 瑞果	神戸大学 大学院システム 情報学研究科	助教	聴覚的注意のモデリング：動的因果モデル と深層学習の連携
白木 隆太	名古屋大学 大学院工学研 究科	大学院生（博 士課程）	超多次元情報を活用する知的フォトニック ネットワーク
末岡 裕一郎	大阪大学 大学院工学研究 科	助教	Self-Attention Neural Network で切り拓 く革新的な群ロボットシステム学
内藤 識	早稲田大学 大学院法学研 究科	大学院生（博 士課程）	公共分野での「信頼される AI」活用に向け たシステムの創出
中西 俊之	名古屋市立大学 大学院医 学研究科	病院助教	鎮痛の自動化に向けた術後の突出痛予測 AI の開発

濱屋 政志	オムロンサイニックエックス リサーチアドミニストレイティブディビジョン	シニアリサーチャー	ソフトロボ・触覚・学習を活用した手応えに基づく自動組立の革新
原口 大地	九州大学 大学院システム情報科学府	大学院生（博士課程）	ビジュアルデザインインフォマティクスの創出
福重 春菜	神戸大学 大学院保健学研究科	助教	個人特性を考慮したナースコール発生予測モデルの作成
Phua Yin Kan	九州大学 工学府	大学院生（修士課程）	AI 駆動型機能性高分子インフォマティクスの創成
松本 啓吾	東京大学 大学院情報理工学系研究科	助教	FEP に基づく感覚特性の推定と感覚情報提示の最適化
三浦 崇寛	東京大学 大学院工学系研究科	大学院生（博士課程）	学問における知識の空白領域が果たす役割の解明と論文探索への応用
三森 隆広	早稲田大学 理工学術院	次席研究員	未知を認識する汎用血球分析 AI の開発
八木 拓真	東京大学 生産技術研究所	特任研究員	大規模言語モデルからの知識抽出に基づく視覚スクリプトの創成
山口 諒	北海道大学 大学院先端生命科学研究院	助教	AI でリアルタイム制御する進化生態系の確立
山崎 貴大	東京理科大学 研究推進機構	嘱託助教	多元磁気雑音解析によるナノコンポジット磁歪材料の鉄損モデル構築
横山 岳	九州大学 農学研究院	助教	農業生産技術開発の加速化を実現するハイブリッド光合成モデルの構築
横山 光	東京農工大学 大学院工学研究院	准教授	AI による深部神経組織の運動時非侵襲計測～脳波・筋電図の限界突破～

(所属・役職は応募時点)

(五十音順に掲載)

<総評> 研究総括：國吉 康夫（東京大学 大学院情報理工学系研究科 教授）

本研究領域は、あらゆる学問分野に最先端の AI 等の情報科学技術を取り込むことによって格段に強化・発展させることや、それらの融合による学問分野の革新や新たな学問領域の創成、新しい価値の創造に繋がる研究構想を持つ若手研究者を支援します。

3 回目の公募となる今回は 115 件の意欲的かつ分野を超えた価値が期待される研究提案がありました。応募者の平均年齢は 30.0 歳、大学院生からの提案も 35 件あり、今年度も多くの若手研究者が情報科学技術を用いて新分野を切り開こうとする熱意を感じました。

選考においては14名の領域アドバイザーの協力の下、書類選考を実施し選ばれた35名の候補者に対し面接選考を行いました。厳正な審査の結果23件の研究提案を採択しました。採択者の平均年齢は29.6歳、大学院生は6名となっております。

化学、生物学、工学、医学、情報学をはじめ、応用数学、介護、農学、デザイン、法学など多様な分野の研究提案を採択できました。AI等の情報科学技術を活用し、他分野の知見も取り入れ、有機的に連携しながら学問を創成していく若手研究者が集い、本領域の3期生として夢のある研究構想を実現していくこととなります。

研究推進においては、幅広い分野でAI等の情報科学技術を駆使して第一線で研究を進めておられる領域アドバイザーが採択者のメンターとなり、領域会議（クローズドな場での研究発表）やサイトビジット等を通じて採択者の研究構想の実現と、研究者としての個を確立するためのアドバイスを行います。また、領域会議等を通じて異分野研究者間のインタラクションを促進し、研究実施中でのさきがけへのステップアップ（早期卒業）など採択者が研究者として成長していけるようサポートします。

選考にあたっては

「先進性・挑戦性・独創性が高く本人の着想に基づいているか」

「提案者の強みや計画の核心が明瞭であるか」

「異分野の知見を取り入れ自らの研究を発展させようとする気概があるか」

「自らの知見を他の研究者と共有し、共鳴しながら成長し、新たな研究分野を見いだそうとする姿勢があるか」

という点を重視しました。

不採択となった提案にも非専門の方に研究の意義が伝わるような大変魅力的なものも多く、主体的にAI等の情報科学技術と各専門分野の知見を深めながら研究していく姿勢や、研究提案によって何がどう変革するのかというビジョンが明確でない、などの点を除けば採択された提案と遜色ない提案もありました。

第3期生が加わることにより、領域内の多様性は一層高まります。現在活躍しておられる1、2期生と共に、深い交流を通して研究をより発展させていくことを期待しております。

戦略目標：「気候変動時代の食料安定確保を実現する環境適応型植物設計システムの構築」

「ゲノムスケールのDNA合成及びその機能発現技術の確立と物質生産や医療の技術シーズの創出」

「革新的植物分子デザイン」

研究領域：「環境とバイオテクノロジー」

研究総括：野村 暢彦

(筑波大学 生命環境系 教授／微生物サステイナビリティ研究センター センター長)

氏名	所属機関	役職	研究課題名
石澤 秀紘	兵庫県立大学 大学院工学研究科	助教	微生物生態工学の「個」と「全体」を繋ぐ新指標の確立
井上 真男	立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構	助教	環境微生物セレノプロテオームの革新的予測法
宇佐見 享嗣	名古屋大学 大学院理学研究科	研究員	機能性ナノカーボン材料の高効率生産を指向した生体触媒の創製
浴野 泰甫	明治大学 農学部	助教	植物寄生性線虫の「環世界」を特徴づける感覚ニューロンの機能解明
小野田 浩宜	名古屋大学 シンクロトロン光研究センター	助教	構造予測 AI が見出すバイオ燃料変換酵素
加藤 俊介	大阪大学 大学院工学研究科	助教	高難度光ラジカル反応を実現する新規生体触媒の進化型開発
倉持 昌弘	茨城大学 大学院理工学研究科	助教	凍結低温制御分子の構造特異機能の解明および個体丸ごと保存技術の開発
後藤 祐平	自然科学研究機構 基礎生物学研究所	助教	光遺伝学による多段階スイッチ可能な物質生産システムの基盤構築
阪中 幹祥	京都大学 大学院生命科学研究所	特定准教授	糖タンパク質代謝を軸とした腸内細菌と宿主の共生機構の解明
四坂 勇磨	理化学研究所 環境資源科学研究センター	訪問研究員	バイオ触媒を用いた CO ₂ 固定技術の開発
澁田 未央	山形大学 学術研究院	助教	転写因子によらない迅速な転写制御機構の解明
周防 玲	日本大学 生物資源科学部	助教	有毒ヒラムシの生活環から探るフグ毒のゆくえ
鈴木 研志	東京大学 大学院農学生命科学研究科	特任助教	複合微生物群における種多様性と機能的頑健性

相馬 悠希	九州大学 農学研究院	助教	人工合成細菌叢による代謝絶対容量の拡張
高村 映一郎	福井大学 学術研究院	講師	多変量解析による網羅的な酵素設計指針決定手法の確立
田中 謙也	神戸大学 先端バイオ工学研究センター	日本学術振興会特別研究員 (PD)	網羅的タンパク電位決定手法の開発による光合成環境適応機構の解明
西山 康太郎	理化学研究所 環境資源科学研究センター	基礎科学特別研究員	ケミカルバイオロジーと構造生物学の融合による花成の理解と制御
疋田 弘之	京都大学 化学研究所	助教	巨大ウイルスによる新規遺伝子工学技術の創出
百武 真奈美	東京工業大学 物質理工学院	日本学術振興会特別研究員 (RPD)	環境調和型材料の低コスト生産を目指した末端構造設計
平岡 聡史	海洋研究開発機構 海洋機能利用部門	研究員	高温環境微生物叢が持つエピゲノム機構の探究
藤原 良介	理化学研究所 環境資源科学研究センター	基礎科学特別研究員	CO ₂ 由来低分子からの超高収率スチレン生産
別所 奏子	東北大学 大学院生命科学研究所	助教	植物形態を改変させる甲虫由来因子の同定
安田 盛貴	奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科	助教	高湿度環境における植物病害防除の基盤構築
吉村 彩	北海道大学 大学院薬学研究院	助教	細胞外膜小胞と二次代謝産物を介した微生物間相互作用様式の解明

(所属・役職は応募時点)

(五十音順に掲載)

<総評> 研究総括:野村 暢彦(筑波大学 生命環境系 教授/微生物サステナビリティ研究センター センター長)

本研究領域では、バイオテクノロジー分野において新分野開拓や新価値創造につながる基礎研究を推進し、将来、真に環境問題に貢献できる技術と人材の創出を目指しています。

本研究領域3回目、最後となる2022年度の公募では、75件の意欲的な提案がありました。15名の領域アドバイザーとともに厳正に選考を進め、書類選考で選ばれた42名の候補者に対して面接選考を行いました。魅力的な提案が多く、絞り込むのに苦労の上、最終的に24件の研究提案を採択しました。

選考では、新規性、独創性、挑戦性、アイデアを重視しました。また、若手研究者の発掘と育成という観点から、これまでの実績のみならず提案された研究課題の今後の発展性など長期的な観点も踏まえ、領域アドバ

アドバイザーそれぞれが是非育てたいと思える研究者を見いだそうと選考を進めました。その結果、今年も生物化学的プロセス、植物、農業から生態現象の解明・制御・応用まで、幅広い分野において、いずれも独創的なアイデアと提案者自身の強みを生かした、挑戦的な研究提案を採択することができました。地域的にも、また所属機関で見てもバラエティに富んだ顔ぶれとなりました。

採択した研究課題は、領域内での他テーマとの連携により将来的な拡がり期待されるテーマも多く、昨年度までに採択された1期生、2期生まで含めた異分野連携による提案者の成長もますます期待される場所です。

「環境とバイオテクノロジー」領域では、領域アドバイザーが採択者個々のメンターとなり、ACT-Xで構築される多様な若手研究者によるヒューマンネットワークの中でお互いに切磋琢磨し、将来的に環境問題に貢献できる先進的な研究をリードする人材として飛躍するためのお手伝いをします。

本領域では、今年が新規採択の最終年度となり、研究者数は70名と最大になります。年々、バイオの分野の研究者から自分の強みを生かしたチャレンジングな研究提案が増え、さらに専門分野がバイオと異なる研究者からもユニークかつチャレンジングな研究提案も数多くいただきました。残念ながら不採択となった提案も含めて優れた提案が多く、人物的にも将来が楽しみな研究提案者に恵まれ、絞り込みに大変苦労しました。その中で採択された研究者のみなさんには、ACT-Xで得た機会をしっかりと活かし切り、自身の将来に向けてチャレンジしていただきたいと思います。相変わらずコロナ禍が続き、いろいろな影響があると思いますが、既に活躍されている1・2期生も含め、研究者同士やアドバイザーとの交流を通じ、研究構想を発展させると共に、研究の幅も広げ、人間的にも大きく育てていただきたいと切に願います。最後になりますが、これまでの3回の応募を通じて多くのみなさまから、未来につながる楽しみなアイデアやチャレンジングで意欲あふれる提案をたくさんいただき、毎回、楽しく審査をさせていただきました。本領域の採択・不採択にかかわらず、ご応募いただいたみなさまに心より御礼申し上げます。